

1. 概要：

- ・初参加の 3 名を含む総勢 15 名で「なぜ贈るのか？」という問いを掲げ、主に、贈る動機は何か、贈り手が込める気持ちと贈るモノとを分けて考えるべきか、について対話し考えた。

2. 対話：

(0) 問いの提起

- ・進行役から、12 月や 1 月はクリスマスプレゼント、お歳暮、お年賀、お年玉等々の贈り物の季節であることに触れ、だから問いに選んだことを紹介した上で、「なぜ贈るのか？」の問いで対話を始めた。

(1) 他者へ贈り物をあげた事例：

- ・アイスブレイクとして参加者から誰かに贈り物を贈ったりもらったりした事例を挙げてもらった。
a) 誕生日にプレゼント (本、入浴剤)、b) 子どもへサンタに代わりクリスマスプレゼント、c) 仕事で世話になった人達にアイスクリーム、d) 退職祝いへのお返しにアイスクリーム、e) 中国にいる友人から特段理由はないが Lineギフト、f) 年賀状、g) お年玉、h) 今生の別れの人へ贈り物、等々。

(2) 贈り物にはどんな意味があるか？

- ・妻の誕生日にバラ 50 本を贈ったが、長持ちしないモノが良い。過去付き合っていた人へプレゼントを多く贈ったが、別れてしまった後で「もらえばなしは嫌だから」と全て返され残念であった。だから、誕生日でも返却できないモノが良いと思う。
- モノを贈ることはイベントに近い。妻に贈ったバラは、「こんなにどうするのよ」と少し騒ぎになったが結局百円ショップで購入したバケツに入れて観賞した。そういう思い出になっている。
- ・モノに気持ちを載せて贈る。それは相手に喜んでもらいたいからである。
- 逆にモノが身近にあるとふと見た瞬間に贈り手の気持ちの存在を自分の意図せずと感じてしまい、嫌な気持ちになることがあるのかもしれない。
- 記憶を定着させる意味があるのではないか。モノがないと、忘れてしまうこともあるが、自分の好きなときに思い出せる。モノを見ると、自分の意思とは別に思い出してしまうので、辛いこともある。
- ・手持ちの 1 万円を誰かへ贈る場合の価値 (=自分の満足度) を考えてみる。イ) 部下に贈る：5 万円、ロ) 上司に贈る：10 万円、ハ) 神社に贈る：100 万円、に相当する。ハ) のように (個人間での共感を経ず) 自分には見えない他者のために贈る寄付のような行為 (効果的利他主義) は満足度が非常に高い。

(3) 贈る動機は何か？

- ・今まで挙がった事例を見ると動機は次の 4 つである。①感謝、②親睦、③相手を喜ばせる (プレゼント、お年玉等)、④祝い (合格祝い)。→全て「相手を喜ばせる」に包含できるのではないか。
- ・受け手が贈り手の気持ちを汲むかどうかは別である (保証されていない)。
- ・贈り手がその贈与という行為によって何かを期待する場合と、何も期待しない場合がある。→何も期待しない事例はあるか？→今生の別れの時の贈り物がそうである。→その場合でも二人の良好な人間関係の維持を期待しているのではないか。
- ・何かモノを贈るとき、計算してメリットとして自分へ見返りを期待する (合理的利他主義) ことはない。
- 最初はその相手のことだけを見て善かれ (目的) と考えて贈る。その後で、自分が嬉しくなったり満足したりすることはある (結果)。→最低でも自分の中では満足感を得るしそれを期待していないか。
- コロナ禍で 10 万円の支援金をもらったが、自分には余裕があるので、困窮者への支援団体へ寄付した。そのとき「自分は幸せだ」と実感し満足感を得た。その両者 (目的と結果) は微妙であり非常に近い。
- ・誰かに贈り物を贈るときに何を贈ろうか考えることは楽しい。その楽しさも贈る動機である。

(4) 他に考えるべきことは？

- ・今まで贈る動機を考えてきたが、どう考えるべきかを考えたい。何かモノを贈るときは、相手のことをしっかり考えて、喜んで受け入れてくれるモノを贈るべきである。→(5)へ
- ・人がモノを贈るとき、A) 贈り手が込める気持ちと贈るモノとを分けて考える人と B) 分けて考えない人がある。A) のように別々に考えるようにしたら良いのではないか。→(6)へ

(5) 相手に受け入れられるモノしか贈ってはいけないか？

- ・相手の欲しくないモノを贈ってはいけないのか。自分が得る喜びを考えて贈っても良いのではないか。
- ・相手が欲しいモノを確認してそのモノを贈る場合と、相手が欲しいモノを自分なりに想像してそのモノを贈る場合を考えてみる。相手ならどんなモノが欲しいかなと想像して贈ることに価値がある。
- 一生懸命に相手の欲しいモノを想像してそのモノを贈ることを否定しないが、ストーカーはそうやって嫌がる相手にモノを贈りつける。
- ストーカーのような事例を肯定したい訳ではないし除外はしたい。ただ、相手が欲しいモノを 100% の確証を持たないとモノを贈ってはいけないとは思えない。

(6) 贈り手が込める気持ちと贈るモノとを分けて考えるべきか？

- ・気持ちとモノをくっ付けて考えなくても良い。ただ、分けて考えられる人と、そうできない人がある。
- ・相手と自分はどう考えてみても違う (異なる人格であり、相手の嗜好を想像するには限界がある) から、「正解が一つである」と考えることはとても窮屈である。
- ・例えば、完全に気持ちとモノは別ものであると考える文化を醸成するために、贈られたモノが気に入らないときは、そのモノをメルカリに出してしまうし、そのことを贈り手にも言ったらどうか。
- できない。相手が自分の選択を否定されると気分を害するだろうから、相手に言わなくても良いと思う。
- 人間関係の維持を大事にするので、相手に「贈り物が気に入らなかった」ということには抵抗がある。
- 米国にはギフトレシートという仕組みがあり、贈り主だけでなく受領者もそのレシートにより店で返品や交換ができる。贈り手は、受け手が気に入らないモノを我慢するより気に入ったモノへ交換してでも使ってくれる方が良く合理的に考えている。だから、慣れの問題ではないか。

(7) 神からのギフトからペイフォワード

- ・今日話をしたかった観点として、神からのギフトがある。自分自身や人生、容姿等は自分ではどうにもできない。これは、神からの贈り物としか言いようがない。
- 「神からのギフト」と聞いて、「ペイフォワード (米国：2000 年)」という映画を思い出した。見返りを期待しない善行が描かれている。ぜひ良い映画なので機会があれば観て欲しい。

3. まとめ

- ・対話では、相手を喜ばせたい、贈り物を選ぶとき自分が楽しい、という動機が挙がった。相手だけを見て善かれ (目的) と考えて贈り、その後自分が嬉しくなり満足する (結果) が、目的と結果は非常に近いようである。最終盤には、「見返りを期待しない善行」という言葉も出てきたが、自分への見返りを期待することはあまり良くないことなのか。時間切れとなってしまったが、ここからはそれぞれによる独考に委ねたい。